

平成26年1月26日
新年懇親会を開く
 講師を招き講演会も開催

平成26年1月26日、ここ数年、恒例となつています宿場町枚方を考える会の新年懇親会が伊加賀東町にある「割烹・藤」で開かれました。これまででは枚方宿鍵屋資料館2階の大広間で行ってきましたが、畳の上の座布団に座るため、腰や膝に負担が掛かるという事で、椅子席の要望があり、今年は畳の上ですが、テーブルと椅子のある「藤」で開催したものです。

新年懇親会は、昼食をとりながら会員同士が気軽に談笑するもので、文字通り懇親を深めるのが目的です。



講師の中倉弘紀さん

この新年懇親会は講演会とセットです。まず、午前11時30分から講演会を開催しました。本年は、桃山学院大学講師の中倉弘紀さんを講師に招き、約1時間にわたり、「千十二支とは」と題し、三千年続いている絶妙な紀時法を拝聴しました。



講演を聴く会員の皆さん

講演が終わると、皆さんお楽しみの懇親会、楽しいひとときを過ごしました。

ちなみに千十とは、「甲、乙、丙、丁…」、十二支とは「子、丑、寅、卯…」です。



第79号

発行

宿場町枚方を考える会
 会長 堀家 啓男
 072-892-5504

事務局

枚方市出口2丁目6-6
 上野幸夫 072-832-5722

編集 広報委員会

主な内容

- 本能寺の変と山崎の戦い (2頁〜5頁)
- 東海道シンポ宮宿大会 (6頁〜7頁)
- かやぶきの里と社家町 (8頁〜12頁)
- 天空の城 竹田城を訪問 (13頁〜14頁)
- うどんの町枚方 (15頁〜16頁)

本能寺の変と山崎の戦い

伊加賀西町 河野 靖忠



昨年の9月、本会の「近郊の史跡を歩く会」として京都府大山崎町にある大山崎町歴史資料館を訪問しました。ここ大山崎の歴史の中で、大きな事件といえば、羽柴秀吉と明智光秀の「山崎の戦い」ではないでしょうか。

頃は戦国時代、今から432年前の天正10年(1582年)6月2日、織田信長が京の本能寺において明智光秀に討たれました。これが発端となり、中国大返し羽柴秀吉軍2万の軍勢と明智光秀軍1万6千の軍勢が激突したのが「山崎の戦い」です。

合戦の直前、羽柴秀吉は、

毛利方清水宗治軍3千〜5千人が籠る備中高松城(現在の岡山市北区)を、備前龜山城(岡山市東区)の宇喜多軍1万人と合わせた、約3万の兵で包囲、軍師黒田官兵衛の策による水攻めを行っていました。この最中、毛利方へ送られた明智光秀の使者が捕らえられ、その使者が「織田信長が6月2日未明、光秀の謀反により本能寺で落命した」との密書を持っていました。秀吉は、「親方様」と泣き崩れたといわれています。この時、軍師黒田官兵衛は「直ちに京に立ち戻り、逆臣光秀を討てば、殿は天下人」と秀吉に進言しました。

秀吉は6月4日、毛利軍の軍僧、安国寺惠瓊を仲介として和議、5日は毛利軍の様子を警戒、そして6日の昼に発

ち、夜を徹して走破、7日には居城である姫路城に到着しています。ここでおにぎりや酒を振舞って一休み。8日に発ち11日には尼崎、さらに西国街道を東へ、12日に摂津富田に到着というのですが、西国街道の摂津富田から大山崎間は道幅2間(3・6m)が多く、ちなみに枚方宿の京街道は2間半(4・5m)です。

昨年11月、本会主催による関西大学の藪田先生の講演では、紀州藩の参勤交代の行列は人数1576人、先頭から末尾まで3・5^キだそうです。

これが約1万7千人になると、どうなるのでしょうか。参勤交代をそのまま当てはめることはできませんが、ざっと35^キ。先頭は摂津富田、末尾はまだ西宮辺りになります。

6日に岡山を立ち、12日の摂津富田到着を信じれば、6

日間で約220^キを走破した
ことになりました。これが「中
国大返し」です。

兵士は、敵を倒せば恩賞を
もらえますが、それにしても
単純に1日37^キ、鎧兜や槍に
刀といった重いものを携えて
の6日間、毎日の走行は想像
し難いものがあります。当時
の弁当は玄米のおにぎりと梅
干。履物は稲の茎や葉で編ん
だわらじ。わらじの寿命は3
里〜4里といえますから、1
人で13足〜15足ぐらい必要
だったでしょう。
約1万7千人の鎧武者は、
食べ物とわらじを自分で調達
しなくてはなりません。行く
先々で調達しながら走り続け
休む間もなく今度は命を懸け
て戦闘、想像したくもありま
せん。途中、摂津衆を取り込
んだ軍勢は約2万に膨れ上が
り、秀吉は桂川の右岸に流れ

込む小泉川の西に陣を構えま
した。



大山崎中学校の横を流れる小泉川

一方、明智光秀は京の治安
維持と地盤固めを急ぎ、若狭
の武田元明、近江大津の京極
高次を近江に派遣します。

ところが、味方に勧誘しよ
うとした有力大名の山岡景隆
には拒否されます。逆に景隆
は瀬田橋を落とし、明智軍の
安土城への入城を妨害、さら
に秀吉へ密使を走らせ、明智
軍の動向を逐一報告するとい
う行動にでています。

織田信長に仕える近江南部
の六角氏の重臣、日野城主蒲
生賢秀も、多大な恩賞で勧誘
されましたが拒否しています。

丹後宮津城主で後の肥後熊
本城主、現在の細川家の祖と
なる細川藤孝は、嫡男忠興の
嫁が光秀の娘、玉（後の細川
ガラシヤ）という姻戚にも係わ
らず、加勢を拒否して剃髪、
幽斎玄旨と名のり隠居してし
まいます。

教養人同士で光秀とは仲良
し、さらに光秀の妻の妹が正
室という大和郡山城主筒井順
慶は、重臣を派遣されたもの
の勧誘を拒絶、城に籠り静観
するという態度にでます。

こうした状況の10日、「殿
秀吉軍が大挙してこちらに向
かっております」という一
報を受け、光秀は男山から撤
収、12日には河内衆など、合
わせて1万6千の軍勢で小泉

川の東に布陣します。翌13日、
明智軍の伊勢貞興隊が秀吉軍
の最前線中川隊を襲撃、戦闘
が始まりましたが、一進一退
となりました。

戦局が動いたのは、秀吉軍
の池田恒興隊と加藤光泰隊に
よる小泉川の渡河からです。
津田隊と光秀軍本隊を奇襲す
ると、光秀側全軍に動揺が広
がり、総崩れとなりました。
光秀が勝童寺城（長岡京市）
に退却した時、兵は700人
ほどに激減していました。



整備された勝童寺城公園の南門

光秀は側近数人と城を抜け出し、坂本城へ落ち延びる途中、現在明智敷といわれる伏見の藪の中で、武者狩りに遭い、竹槍で刺され、これまでと自害して果てたといわれています。

光秀が細川藤孝に加勢を要請した手紙があるそうで、その中に「本能寺の事は思いがけず唐突に…」という文言があり、計画的ではないということをお互に伺わせます。しかし、頭の良い光秀は、「天下布武」を掲げ、人を殺しまくる信長を決して快くは思っておらず、恩義はあるものの、自分は6歳年上にもかかわらず、人前でぼろかすにいわれ、さらに出世争いのライバルである秀吉に「加勢しろ」との命令。ところが総大将は秀吉で、「その傘下に入れ」は、光秀にとつてこれほどの屈辱はないはず

です。もし、ここで信長を討つても必ずや、いや少なくとも順慶や藤孝は味方してくれるはず、との思いがあつたのではないのでしょうか。順慶の45万石、藤孝12万石の軍勢力を合わせ、さらに中国の毛利と手を組み、四国は長曾我部元親に任せて戦乱を終わらせれば、「必ずや自分は天下人になれる」と信じていたのではないのでしょうか。

その頃、徳川家康は、本田忠勝、伊井直政、榊原康政、酒井忠次、石川数正、服部半蔵正成など重臣34人と、武田信虎の娘を母に持つ穴山信君と堺に滞在していました。そこで信長の上洛を知り、京へ向かう途中、四條畷で京の呉服商茶屋四郎次郎から一部始終を伝えられました。慌てた家康は自害も考えたといわれています。しかし、本田忠勝

に説得され、伊賀越えて岡崎城に帰還しています。この時、堺見学から岡崎城まで、伊賀甲賀衆が家康を守つたといわれています。

穴山信君は四條畷から別行動しますが、山城国綴喜の木津川河畔で落ち武者狩りに襲撃され、落命しています。

信長を含めた本能寺での戦死者は約110名。一般的に信長は、中国攻めの秀吉の援軍に行く途中、本能寺に立ち寄つたといわれております。

しかし、秀吉の援軍要請は信長に華を持たせるための要請でした。これは羽柴軍だけで勝ち続けられ、後に禍根を残す原因となるからです。1185年、平家を壇ノ浦まで追い詰め、滅亡させた源義経の例があります。

この時の羽柴秀吉軍は約2万、宇喜多軍1万、明智光秀

の1万3千を合わせれば毛利軍にも十分対抗できます。さらに秀吉には跳び抜けて優れた軍師黒田官兵衛が付いています。信長は、秀吉と官兵衛、そして光秀に、中国、さらに九州をも平定させ、その領地を光秀、秀吉に与えることにより、彼らを近江や京から遠ざける算段をしていたのではないかと思えるのです。

信長は光秀に討たれる前日の6月1日、博多の豪商鳥井宗室、神谷宗湛そして京の公家たちを招いて茶会を催しています。目的は鳥井宗室が持つている、天下三大名物茶入れの一つ「檜柴肩衝（ならばかたひら）」が欲しくてたまらなかつたのです。そのため29日、安土城を出る時、茶会に必要な道具一式を本能寺へ運び込んでいます。信長は茶入れ収集に凝つて

いて、三天名物茶入れのうち「初花肩衝」「新田肩衝」はすでに持っていました。あと檜柴肩衝さえ手に入れば三点とも揃うのです。

信長には、御茶頭という茶会を仕切る係り、今井宗久、津田宗及、千宗易の三人が任命されていて、この人達がいないと茶会を開けないのです。

今井宗久と津田宗及は徳川家康の接待係りをさせ、残る千宗易、後の「千利休」にこの茶会を仕切らせていたのではないかと思われるのです。

千宗易が5日前、養子の千少庵へ宛てた手紙が残っているそうです。それによれば「上様御上洛の由承った。播州はどうなっているのか早々に連絡を請う」という内容だそうです。その中で、光秀に襲われた6月2日の5日前なら5月28日、信長が安土を出発

する前日になり、それを秀吉と行動をとる千少庵から知らされています。その千少庵に秀吉の毛利攻めを聞いていたわけで、この時、千宗易が自宅の堺にいたとすれば、すぐに出発し、堺から船で大阪へ、そこから淀川を遡り宇治に着けば、6月1日の本能寺の茶会には十分間に合うのです。

当時の信長や有力大名は、「らっぱ」「すっぱ」「伊賀者」と呼ばれる集団を組織して、各地の情報を常に収集していました。情報がなければ戦争などはできません。羽柴秀吉の毛利攻めや上杉景勝には柴田勝家、そして土佐の長曾我部元親攻めには神戸信孝が当たり、彼らの軍は出城と呼ばれる柵や城を次々と落とし、有利な戦いを進めているとの情報が入っており、全然心配

することはなかったのです。

信長は、もつともらしく京の公家などを呼んで茶会を開くのですが、実は趣味の茶道具の収集のことで頭が一杯、檜柴肩衝を手に入れるのが目的で、側近だけを引き連れて、ノコノコと本能寺にやって来たというのが本当ではないかと思うのです。ここで明智光秀に討たれるとは、夢にも思っていないかったのではないでしょう。

「歴史と事実は違う」という有名な歴史研究の先生の言葉が耳にしました。ここでの歴史とは、「岩波書店」の古典文学大系である、日本書紀、古事記、風土記、源氏物語、太平記、平家物語など、約百点あるそうです。特に重要な国史である日本書紀は、「当時の中国史書に合わせるために無理に引き伸ばした」という

説をいわれる先生方もあって、確実性が乏しいと思います。

私が今見ているのは文庫本の「日本書紀」ですが、これを「にほんしよき」と読むのか、「につぼんしよき」と読むのかもはっきりしていません。近年、古墳の発掘、鉄剣銘文や木簡の出土により、少しずつ古事記や日本書紀の記事と整合できるようになってきました。

ここに書いた「山崎の戦い」「本能寺の変」は資料が乏しく、歴史の研究者や先生方が研究された物をまとめたものです。資料が乏しいため、推測や各先生方の考えが混じり確実性に欠けています。特に鎧武者の数は、この時代の常として誇張されていますが、先生方が書かれた数字を尊重し、そのまま載せております。

第26回東海道シンポジウム

宮宿大会に参加

出口 上野 幸夫

枚方宿大会から引き継がれた第26回東海道シンポジウム宮宿大会は平成25年10月26日、名古屋市の熱田神宮文化殿で開催されました。

本会が、このシンポジウム開催団体であるNPO法人東海道宿駅会議の会員となつて始めての参加です。

しかしながら残念なことに当日は、数日前より発生した台風27号が接近し、その進路にあたることから、例年、実施されず会員交流会および翌日の現地見学会は中止となりました。10日前に26号が伊豆大島に大きな被害をもたらしただけに、安全のためやむを得ないと思います。唯一、会員相互の情報交換の場であつただけに、関係者の苦渋の選択だったと拝察します。約200人の参加によりますシンポジウムは定刻に開始

され、草薙典龍実行委員長、宮本哲也熱田区長、松山正巳東海道宿駅会議理事長の挨拶がありました。続いて南山大学の安田文吉教授により「熱田区街道つながり事業」をテーマとする基調講演がありました。挨拶および基調講演の中から、当地熱田に関する案内がありましたので紹介させていただきます。

熱田神宮

熱田神宮には日本武尊（やまとたけるのみこと）にまつわる神話が伝わっています。日本武尊の妻、宮實媛命（みやすひめのみこと）は、夫亡きあと、形見の草薙の剣（三種の神器の一つ）を熱田神宮元宮に奉納しました。その剣は今も熱田神宮に祀られています。

熱田神宮の本殿は1929

年（昭和4年）の伊勢神宮第58回式年遷宮の折、造営された内宮の社殿で、昭和28年の第59回式年遷宮の後、熱田神宮に譲渡されたものです。昨年、創祀1900年の慶節を迎えた貴重な文化財です。

宮宿

宮宿は東海道57次41番目の宿場で、宮宿から桑名へ渡る東海道唯一の海路「七里の渡し」の渡船場があり、街道屈指の大宿でした。残念ながら、第一次世界大戦で焼失し、江戸期のものはほとんど残っておりません。

象の鼻（熱田台地）

弥生時代は、熱田区のひとつは海だったといわれています。名古屋の街は洪積世台地の上にあり、その台地は名古屋城を北端とする那古野台

地と熱田神宮を南端とする熱田台地で形成され、名古屋台地と呼ばれ、その形は象の頭部に似ています。また、熱田台地の西端には多くの古墳があり、周りの神社仏閣と合わせ、歴史とロマン、さらに埋蔵文化財の宝庫でもあります。

街道往く(司馬遼太郎)

宮木熱田区長の挨拶の中で、司馬遼太郎が名古屋をポジティブに書きたいといつて、「街道を往く」の最後として尾張を書き始めましたが、その途中で亡くなられたことは大変残念だったとされ、彼が何を書こうとしたのか、思いを馳せていただきたいと皆さんに問いかけられたのは印象的でした。

基調講演

熱田で育った安田教授から、

幼少期の思い出話を織り込みながらの基調講演がありました。その中で次のようなお話をいただきました。

このすぐ近くに、旗を織つて熱田神宮に納めていた町、旗屋町があります。町名を変えろというので市役所にねじ込みました。その結果、名前が残ったということです。

あちこちで歴史や土地柄が判らなくなるような味気ない住居表示(町名)へ変更されていくのは誠に残念…という行政への苦言がありました。私も全く同感であります。

また、この名古屋、熱田は信長、秀吉、家康の因縁深い土地ですが、忘れていけないのは源頼朝の生誕地でもあったのです。頼朝が生まれた寺はすぐ近くにあり、由緒ある土地ですが、東海道中膝栗毛では按摩さんが出てくるだけ

の話で、すぐに桑名に行ってしまったが、認識不足でけからんと嘆きの言葉を発して残念がっておられました。お気持ちは十分理解します。

トークセッション

最後にトークセッションとなりました。コーディネーターは、名古屋学院大学教授の井澤知旦氏、パネリストは熱田区長、実行委員長、宿駅会議理事、宮商事社長、妙香園専務です。

長い歴史をもつ熱田ですが、この歴史をどう継承していくか、また現在の街づくりに繋げていくかについてトークがありました。それぞれの企業、行政の立場からの意見もありましたが、このシンポジウムの開催を通じて若い世代との交流もあり、溝がなくなつたなど、喜ばしい意見もありま

した。最終的には地域の歴史を知ることができる社会づくり、交流ができる街づくりといった横の部分、そして世代の交流ができる地域づくりとといった縦の交流が大切であるとまとめられ、トークセッションは終わりました。

最後に宿場旗が宮宿から来年の藤沢宿に引き継がれ、シンポジウムは終了しました。



かやぶきの里と

社家町を訪ねて

香里園桜木町 鳥井 敏宏

訪ねたいと思っていた京都府南丹市の美山町と京都市北区にある上賀茂神社社家町の見学、さらに珍しい鹿肉料理も賞味できるという、贅沢なプランを案内いただき、すぐに申し込みました。

好天に恵まれた平成25年11月27日、定刻に出発したバスは京都縦貫道を経て美山に向かいます。堀家会長さんの挨拶、上谷副会長さんのコース案内に期待はますます

膨らみます。配布された資料を読んだり、車窓を楽しんでいると、美山町の「かやぶきの里」に到着しました。

かやぶきの里

先に記念撮影をすると、現地ガイドの中野さんの説明による見学が始まりました。山々の紅葉を背に、静かで落ち着いた民家集落のたたずまいは、「里の秋」「もみじ」など、童

謡そのものの世界。「日本の原風景」といわれる由縁、たたと納得し、思わず歌を口ずさみたくなりました。「明日から雪、今日は秋の見納め。皆さんはよいときに来られました」とガイドさん。また11月というのに、当地の厳しい自然の一端を知りました。

美山町は、京都と日本海の玄関口である小浜との中間に位置し、西の鯖街道として交通上重要な位置を占めていま

した。おばさんが若狭から鯖やへしこを背負って売りに来ていたのは、そんな昔のことではないそうです。



駐車場から見たかやぶきの里

美山町の北村は現在50戸の集落。38棟が茅葺き屋根の建築で、集落の数では全国3位を誇っています。江戸時代に建てられた家が多く、寛政8年(1796年)建築のもの

のが最古で、建材は周りの山から調達しています。

茅葺き屋根の最大の敵は火事です。ガイドさんが、各戸にある「この村唯一の近代的装置」と表現された放水銃を見せてくれました。毎年12月に行われる一斉放水の訓練は、本などでよく目にする有名な風景です。

茅はスキを使っています。自給する「かや場」は村が所有していました。売れる材木を茅場に植えたため、茅場が減り、今では他から調達しています。1回屋根を葺くと昔は50年持ちましたが、今では囲炉裏の煙で燻すこともなくなり、20年しか持たないそうです。気になるのが費用です。1回900万円掛かると聞いて驚きましたが、保存地区の指定を受けており、8割の補助があるそうで安心。し

かし、維持管理が大変なことに変わりはありません。

「破風(はぶ)」は屋根裏の煙を抜くために設けられており、穴の形は各家で特徴があります。



煙り出しの穴に家紋が付いている

屋根の棟に跨ったX字形の組み木を「うまのり」と呼び、一般的な家屋には5本付いています。うまのりに渡してある棒は「雪わり」、棒を境に雪が左右へずり落ちるので、豪雪地帯ですが雪下ろしの必要

がないという、雪国の知恵と工夫に感心しました。



ただいま、屋根の葺き替え中

次に二百年前の中層農家住宅の形を残している美山民俗資料館を見学しました。火災に遭い、平成14年に再建された施設です。生活体験棟(母屋)、生産具展示棟(納屋)、生活具展示棟(土蔵)の3棟があります。畳の間は二間という制限があり、あとは板の間と土間。土壁がなく、板壁

も特徴のひとつです。囲炉裏の上は竹のスノコ天井にしてあり、その上の二階の部屋で保存している茅を煙で燻せるようになっていきます。山仕事の道具類や生活具から往時の杣人(そまうど)木こりの生活を思い浮かべました。



美山民俗資料館

北前船から小浜に陸揚げされた、唐津、伊万里の焼き物もあり、山奥の村と日本各地を結びつける、当時の水上交

通の発達の様子を再認識させられました。座敷でお茶をいただいていると不思議と安らぎを覚えました。

このあとは集落の散策です。空間を大事にした屋敷割り、家と家の間を塀や生垣で囲わない開放性が大きな特徴で、「売らない・壊さない」を協定の柱に据えて、村全体で保存に努力されています。



散策中の会員

昼食は河鹿荘での鹿肉料理です。少し歯ごたえがあり、

癖のない鹿肉を美味しくいただきました。



美山町自然文化村 河鹿荘



鹿肉料理のもみじ御膳

食事を済ますと、道の駅「美山ふれあい広場」での買い物です。皆さん、お土産を求めてレジに並んでいました。買い物タイムのあと、北山杉の濃い緑や高雄の川沿いの美しい紅葉を楽しんでいると、次の目的地である上賀茂神社に到着しました。

上賀茂神社・社家町

二班に分かれ、まずはご神体である神山（こうやま）を拝礼しました。



神山

上賀茂神社のご祭神は、賀茂別雷大神（かもわけいかづちのおおかみ）という雷の神様です。

鳥居を通ると、細殿の前にある「立砂（たてすな）」と呼ばれる円錐形の砂山に迎えられました。左右二つの砂山は男女を、山は神山を表しているそうです。



立砂

次に、境内の紅葉が美しいところへ案内していただき、そのあと小川に沿った小道に出ました。ガイドさんによる

と、この道は「鬼平の小道」と呼ばれ、ここでテレビドラマ「鬼平犯科帳」の撮影が行われたそうです。



鬼平の小道とならの小川

この小川は、境内では「ならの小川」、社家町（社家の住居が集まった所）の入口からは「明神川」と名を変えて、社家町の堀の役目をしているきれいな川です。

社家とは、かつての世襲神職の家筋のことで、社家の住居を意味することもあります。明神川を渡る橋は、各家に

つずつと決められており、現在15本の橋が環境物件に指定されています。

各家には明神川から水を取り込む「取り口」があり、庭に水を引き込み、そして川に返しています。明け六ツ（午前6時頃）、神官はこの庭の水で禊（みそぎ）をしたそうです。今は「織紬のつだ」という小さなお店を構えている一軒の社家を見学しました。



見学した社家（織紬のつだ）

平屋建ての立派な屋敷で、落ち着いた雰囲気があります。ご好意で、木々の多い立派な庭に入れていただくと、禊の場所が残っていました。



庭にある禊場

そのあと、社家町の東端にあり、明神川の守護神となっている藤木社（ふじのきのやしろ）まで歩きました。樹齢五百年のクスノキがあります。ここから来た道を振り返ると、社家町の土塀が続ぎ、明神川

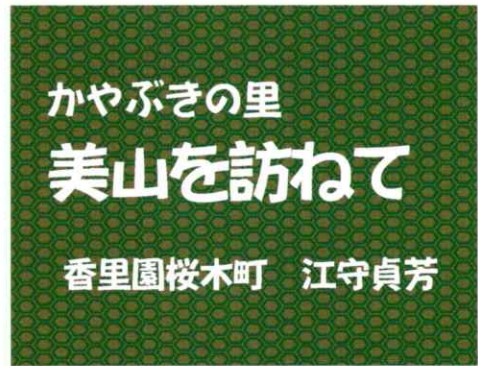
と各家の橋、東山の遠景がすばらしい眺めです。

かつて275軒もあったという社家町の往時を偲びながら、しばし美しい風景に見とれていました。それと同時に地域として景観の保存に努めておられるのを感じました。「1時間で話をするのはむずかしい。もっと時間がほしい」と熱心に説明してくださったガイドさんにお礼をいっただきは、もう日も暮れ始めていました。

訪問した「かやぶきの里」と「社家町」は、「重要伝統的建造物群保存地区」の選定を受けています。日常生活を送りながら、歴史的景観の保存、さらに来訪者にくつろぎと感動を与える努力に深く敬意を表したいと思いました。期待以上に楽しく勉強になった見学会でした。

好天の日和に恵まれた平成25年11月27日(水曜日)、宿場町枚方を考える会の会員など、34人が京都府南丹市美山町にある「かやぶきの里北村」を見学しました。

到着すると、一行は紅葉真直中、気さくなボランティアガイドの案内で美山散策を始めました。メインは美山民俗資料館でした。かやぶきの里北村が重要伝統的建造物群保存地区に選定されたとき、こ



の地にあった200年ほど前の中層農家形態を残していた「伊助」という屋号の建物を移したもので、往時の姿として平成5年に開館しました。

ところが平成12年に火災で焼失、現在の資料館は、平成14年に再建されたものです。母屋は生活体験棟、納屋は生産具展示棟、蔵は生活具展示棟として公開されており、農機具、生活道具など、貴重な品々200点以上が展示され、かつての美山生活に触れることができました。なお、資料館は「かやぶきの里保存会」が運営しています。

昼食は「紅葉御膳(鹿料理)」をいただきながら、参加者めいめいが交流を深めました。その後、京都市内に移り、上賀茂神社と社家町の散策を行い、大変楽しいひとときを過ごしました。



参加者全員の記念写真(南丹市美山町 かやぶきの里 北村)



竹田城跡入口

昨年の 11 月、山城遺構としては全国屈指といわれる竹田城跡(但馬乃国 虎臥城/兵庫県朝来市和田山町)とその城下町を訪問しました。

但馬にそびえる天空の城

竹田城跡を訪問

船橋本町 上谷勝己

竹田城は、但馬守護であった山名持豊(宗全)が永享 3 年(1431 年)、播州の赤松氏や丹波守護の細川氏に対抗するため、太田垣光継に対する播磨・丹後・但馬の交通の要衝である竹田の地に築城を命じたのが始まりです。

嘉吉の乱が勃発した嘉吉元年(1441 年)、山名氏と赤松氏の対立は深刻な状況になっていました。

そうした最中、竹田城は 13

年の歳月を費やし、殿村を大手とする土塁をめぐらした「安井ノ城(和田上道氏日記)」として嘉吉 3 年(1443 年)に完成しました。

竹田城は、赤松氏に対する山名氏の最前線基地となり、以後、太田垣氏が七代にわたり城主となりました。

天正 5 年(1577 年)には、羽柴秀吉の但馬攻めにより、弟の羽柴秀長が城代となりました。以降、竹田城は織

豊方の拠点城郭として機能しました。天正 8 年(1580 年)、秀長は出石・有子山城に入り竹田城は秀長の属将・桑山重晴に預けられました。その桑山重晴が天正 13 年(1585 年)、紀伊和歌山城代に転じると、赤松廣秀が城主となりました。

廣秀は天正 5 年、秀吉の播州進攻のとき、播州龍野城の城主でしたが、戦わずして城を明け渡し、平位郷佐江に蟄居しました。その後、秀吉に願い出て、蜂須賀正勝の配下として中国攻めや四国攻めに加わり、その功が認められ竹田城主となったのです。時に 24 歳。その後も小田原城攻めや二度にわたる朝鮮出兵、文禄の役(1592 年~93 年)に 800 人、慶長の役(1597 年~98 年)にも 800 人の兵士を従えて参戦しまし



天守台

た。(中川家文書・太閤記)
慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦いに先立ち、東軍方の細川氏の守る丹後田辺城を攻めましたが、石田三成の西軍が大敗したことを知り、竹田城へ撤退しました。その後、西軍方の鳥取城を攻略しましたが、城下に火を放ち、市中を焼いたため、家康の怒りに触れ、慶長5年10月28日、無実の罪を着せられて自刃しました。享年39歳。



本丸の石垣

竹田城は嘉吉3年(1443年)、山名宗全が竹田の地に「安井ノ城」を築き、その後

その赤松廣秀は、天正13年(1585年)から慶長5年(1600年)までの15年間、竹田城最後の城主として朝来郡・養父郡内の2万2000石を領有、善政を行い、民に「仁政の主君」として慕われていました。

天下人豊臣秀吉により築城から169年目にして、空しくも「天下の山城」は廢城となり、「武士の夢の跡は…」草木の露となつて消え去りました。竹田城については、古い伝承を記した和田上道氏日記しか史料がなく、当初の姿は不明な点が多いのも事実です。石垣遺構周辺に存在する曲輪から、本丸・天守台の山頂部へと三方に延びる尾根上に曲輪を連続的に配置し、さらに堀切や豎堀で防御性を高めていたと思われれます。

一方、織豊期以降の竹田城は、最高所の天守台(標高353・7m)をほぼ中心に置く石垣城郭となり、本丸以下の南方には南二の丸、南千畳が、北方には二の丸、三の丸、北千畳が築かれています。さらに北西部には、花屋敷と称する曲輪があります。大豎堀



本丸からJR竹田駅方面

や登り石垣なども確認され、倭城の築城形態に做った造りになっています。

竹田城の縄張り規模は、南北約400m、東西約100mで、完存する石垣遺構としては全国屈指のもので、昭和18年に「国史跡」と指定され、平成18年には日本城郭協会から「日本100名城」に選定されました。眼下の円山川の川霧で霞むことから、天守の城とも呼ばれています。

うどんの町枚方

小倉東町 平良一郎

枚方がうどんの町であることは、枚方市民にはあまり知られていないようです。むしろ市外のの方にとつては「ひらパー」とともに有名なくらいです。

現在、枚方市駅周辺半径 5 km 以内に 30 軒ものうどん屋がひしめいています。なぜ枚方がうどんの町になったのでしょうか。枚方のうどんの歴史を紐解いてみました。その結果、枚方をうどんの町に育

てた三人の貢献者を見つけました。

ここで簡単ですが、その三人を紹介します。

山下政右衛門

まず一人目は、交野郡津田村の山下政右衛門です。

彼は、江戸の初期、そうめん発祥の地である三輪地方(奈良県桜井市)で三輪そうめんの製造法を学びました。そして枚方

の気候や風土にあった河内そうめんを開発しました。

河内そうめんは、その品質の高さから、江戸時代には、地元の枚方宿で大量に消費され、さらに、近江国、但馬国、尾張国など、遠方へも出荷されました。

そして枚方を代表する産業のひとつにまで発展したのであります。現在、彼を顕彰する石碑が JR 津田駅近くに立っています。



山下翁頌徳碑 (津田西町)

大阪うどんの特徴は「丸いうどん」という点で、その丸い形はこの河内そうめんの製法に由来しているそうです。

かつては希少価値から「まぼろしのそうめん」と呼ばれ、京都の料亭などで珍重されていました。現在、枚方での河内そうめんの生産は、津田西町のご夫婦が伝統を守るためにがんばっておられます。

恩地幸太郎

二人目の貢献者は、恩地幸太郎です。

昭和元年（1926年）に河内そうめんの伝統技術を応用して、恩地食品を枚方町伊加賀に創立しました。



恩地食品（伊加賀西町）

それまでのうどん作りは氷屋の冬の副業でしたが、初めて専業メーカーができたことになりました。恩地うどんは幅広い人気を集めています。現在は三代目の恩地宏昌さんが社長です。

南長作

貢献者の三人目は、南長作。昭和45年（1970年）にうどん業界で讃岐うどんをいち早く先取り。枚方市で屋台を始めて、釜揚げうどんで大成功を収めました。「釜盛」の創業者です。

貢献者三人の共通点は、人のやらない新しいことにいち早く着眼し、大きなリスクを背負って実行したことだろうと思います。その結果として大成功になったようです。



釜盛（甲斐田新町）

新入会員紹介

河野不二夫さん
寝屋川市

千喜良 淳さん
東中振

会員募集中です

本会は、年数回の講演会やバスを利用した他宿場などの日帰り見学会、会誌を発行しています。会費は月300円。ご希望の方は村次信子まで。電話（891）6162。

平成25年度講演会活動報告

平成25年3月24日 枚方市立メセナひらかた会館においてNPO法人シニア自然大学理事の田中晃さんを講師に「淀川環境と治水の歴史」を開催。

平成26年1月26日 割烹「藤」において桃山学院大学講師の中倉弘紀さんを講師に「十干十二支」を開催。

11月3日 同じく枚方市立メセナひらかた会館において関西大学文学部教授藪田貫さんを講師に「大名行列と枚方」を開催。

12月7日 枚方宿鍵屋資料館において堀家啓男本会会長を講師に「行基と枚方」を開催。